

## 後藤論文に対するコメント

渡辺 仁

最近の考古学界は理論と方法という点で一つの大きい曲り角にきているように見える。これは考古学に限ったことではない。記載から説明へ、また形態から機能へという指向の変化（増大乃至積極化）は第2次大戦後の動植物学や人類学一般に共通する現象であって、考古学に起りつつあるそのような変化は人類学に起ったそのような変化の影響或は波及とみることもできる。自然人類学方面に起った new physical anthropology の波、文化人類学に起った cultural ecology や structural anthropology や new evolutionism の波に対応するものが考古学に起った new archaeology をはじめとする新しい波ということができよう。後藤君の評論に紹介されている最近の諸理論は以上の新しい波を代表するものである。その波は欧米の各地で次々に発生し大小様々の波紋を描きそれらが交錯しているので、一見すると混沌・雑然のように見えよう。それらの理論の間には確かに全体として一貫したものがなく、相互の関係も密接ではないが、それぞれの存在理由——なぜそのような波が起ったかの必然性——は明白である。次々にあらわれたそれらの諸理論は既存のものを否定するよりも、それらの足らざるを補う役割を果たしている点が重要である。つまり次から次に新理論が出てくるが、それらは前説にとって代るような代替的な理論という場合は稀で、前説の欠けた所を補うような補完的な理論が一般的である。それはちょうど、形態的要素比較主義にもとづく民族学—人類学に対して機能主義にもとづく社会人類学が出現したのと似たような状況である。形態と機能は本来貨幣の表と裏のように一体のものであって、当然そのように統合的に取扱うべきものであるが、学史上の実際では先ず形態主義が機能を度外視して生れ育ち、その欠陥について後に機能主義が発生し発展した。これは新しい面——機能——の重要性を強調するあまり形態主義を否定した。しかしこれはおかしい。客観的にはそして学問体系としては、さらに一步進んで両者——形態主義と機能主義——を統合する理論が欲しいところである。また文化や社会の研究は或程度の発展をとげてきたが、その根底にある生活についての我々の体系的知識——その構造と機能の理解——は未だ極めて貧弱なのである。このようにみえてくると、現象は多岐多様であって、それらの謎をただ一つの鍵で解くことがいかに難かしかがわかる。次々に新しい鍵がみいだされ新分野が開かれても、なお未解決未開発の分野は残り、これに対する新しい鍵の発見が要求されるであろう。第2次大戦後の欧米考古学の特筆すべき研究動向は冒頭に述べたように、記載から一步進んだ説明への積極的指向であるが、この説明とは何かというと考古学的現象（遺物・遺跡）の社会・文化・環境の中での意味づけ（変化する時間的枠組と変異する空間的枠組の中での意味づけ）である。これを以前とはちがって積極的に問題にしはじめたのである。これは要するに人類学的視点の導入に

ほかならない。いいかえると遺物の研究から人間の研究への移行である。遺物を人間（文化・社会・環境）との関係でとらえるという意味で、それは明らかに機能的なアプローチといえる。後藤君のエッセイに登場する最近の考古学の新しい諸理論はすべて、このような意味で機能的であり、それ故に冒頭に述べたように、人類学における戦後の機能指向的变化に対応するものとみることができ。但遺物と人間（文化・社会・環境）との関係といっても、人間には物質面（物質文化・経済・自然環境等）と非物質面（精神文化・政治・社会組織・超自然環境等）があって、遺物の側からは物質面との関係の方がより直接的であり、関係が比較的求めやすい。戦後の新しい機能主義的動向として華々しく登場してきた考古学的新理論の大半はこのような文化・社会或は環境の物質面における遺物の機能を探るアプローチであり、いいかえると遺物にもとづく生計（衣食住）・経済・生態系等の研究理論である。W. Taylor をはじめ、L. Binford 等がその代表である。それに対して文化・社会・環境の非物質面に関する遺物の機能を探るアプローチ、いいかえると遺物にもとづく社会組織・政治組織・宗教・芸術・世界観・価値体系等の研究は遺物の質的量的制約も大きく前者のアプローチより困難が伴っている。従って研究は前者の場合より遙かに乏しく立遅れている。例えば社会組織へのアプローチはケース・スタディーズとして各種の試みが行なわれている（例、Redman, C. L. et al(Eds), *Social Archaeology*, Academic Press, 1978; Hill, J. N., & J. Gunn (Eds), *The Individual in Prehistory*, Academic Press, 1977; Yellen. J. E., *Archaeological Approaches to the Present*, Academic Press, 1977)。しかし体系化された理論といえるようなものはまだみられない。G. V. Childe の *Social Evolution* (1951) 等は古典ではあるがその点で学ぶべき点の尽きない理論の参考書としての価値を失っていない。後藤君のエッセイで特に注目すべき最新の動向として紹介されている *Symbolic archaeology* は以上のような遺物を通して文化・社会・環境の非物質面を探るアプローチであるが、就中未開発な観念的側面の解明を旗印とする点で上述の *social archaeology* と異なり、それ等とならんで相互補完的な意味と役割をもつものといえる。

以上でわかるように考古学の理論と方法の研究における最近の動向の特徴は多様化と専門分化である。形態型式中心の伝統的アプローチ（遺物の学問）ではせいぜい地域と時代の専門別しかなかったが、構造機能を追求する近代のアプローチ（文化・社会・生活の学問）では、対象分野の拡大だけでなく、その分野の多面性のために旧来のように単純な地域と時代程度の専門別では対処しきれなくなってきたように見える。これは考古学も科学一般と同様に学問としての近代化の方向に一歩をふみだしたしるしといえよう。学問の近代化——特殊化と精密化——は避け難い発展法則でありそれなりの必要と利点があるが、実際上の欠点もある。それは統合がますます困難になるということだ。しかし学問の究極の目標は現象の統合的理解であるが、考古学でも研究の分化に対応して常に統合の努力が重要な課題になってくる。既存の鍵を利用するときは有効なものはどれでも利用しなければならない。既存の鍵が有効でなければ新しい鍵を自ら発見するか作りださねばならない。このエッセイで紹介されているような新しい機能的分野が開けてくるにつれて考古学の研究には混

渡 辺 仁

沌としながらも大きな新しい国際的な潮流が湧き起ってきていることは否定できない。研究者個人としてはどの鍵、いかなる鍵をとるかが問題である。